

生活

seikatsunews@asahi.com

大阪市の会社員、宮本幸一さん(62)は2011年7月に喉頭がんが再発、大阪府立成人病センターでがんの切除手術を受け、声帯を失った。しかし食道に空気を出入れし、再び声を取り戻した。食道発声の教室はセンター内にあり、NPO法人「成喉会」が運営している。理事長の増井龍之助さんは、宮本さんが着実に食道発声を習得していく様子を感じ取っていた。

「短期間でここまでできるよう研修会への参加を勧められた。

後輩を励ます側に回ろう

手術で声を失った直後のことを思い出した。思うように声が出せないとき、少しでも出ると、先輩がほめてくれたのが励みになった。伝えたい言葉を相手に伝えることが喜びにかわった。「今度は自分が後輩を励ます側に回りた」。そう思っただけで参加を決めた。研修会は3日間。喉頭がんの診断と治療、障害者政策などについての解説の講義があった。ほかに、のどに電気シェーバーのような機械をあてて声を出す発声方法についても説明を受けた。

食道発声ができるよう持ち歩いている筆談用

患者を生きる

2610

つながって

もう一度声を4



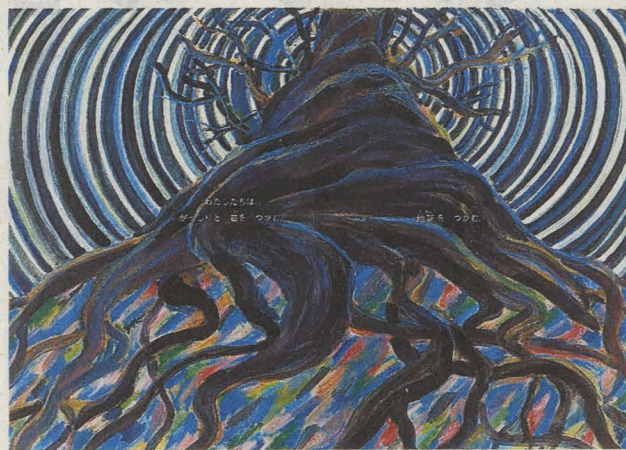
・本日のお題・

大切な人を亡くしました

母、兄、友人……。大切な人たちを相次いで亡くしました。心にあいた穴がなかなかふさがらない私におすすめの絵本はありますか。(65歳・女性)

わたしは樹だ

(アノニマ・スタジオ、1620円)



磯崎園子さん

絵本・児童書情報サイト「絵本ナビ」編集長。小学5年の男の子の母。

本日の店長

つながる 命の存在感

大切な人との別れ。とてつもなく大きなその悲しみは、だれにでも平等にやってくる。大人にも、子どもにも。

周りの人たちは、その心のすべをわかってあげることができません。できることがあるとすれば、ただ寄り添ってあげることだけでしょうか。

絵本も同じかもしれません。「読めば心が癒やされる」なんて答えはないけれど、ふとした時に読んで力をもらえることはあると思うのです。

「わたしは樹だ」(文・松田素子、絵・nakaban)という絵本があります。屋久島を舞台に、もう何千年も立ち続けている樹が自らの命を語ってくれます。小さなタネだったその樹は、かたい岩の上に根をのびし、わずかな土にくらいつき、

強く大きな樹になっていく。「生きる! 生きる! 生きる!」その圧倒的な命の存在感を目の当たりにすると、何かが揺さぶられるのを感じるのです。

1本の樹の命が、光と水、動物や植物、目にも見えないほどの小さな菌、そして命が絶えていった倒木など、すべてがつながっているという。そしてまた自分自身も次の命へとつながっていく。

こうした流れが、なぜか優しく体に染み入ります。閉ざされた心のうちに、少しでも灯をともしることができれば。まだまだ穴はふさがらないとしても、前に進んでみようという気力が生まれてくれれば。生きていく人の背中をそっと押してくれる、この絵本がそんな存在になってくれればいいと思うのです。

死別の悲しみをどう受け入れていくか、をテーマにした絵本もあります。「くまとやまねこ」(文・湯本香樹実、絵・酒井駒子、河出書房新社)は、くまを主人公に、なくしてしまった最愛の友だちを思う気持ちを丁寧に描きます。

これも効く



喪失感にたち向かう力強い子どもと支える大人を描くのは「でも、わたし生きていくわ」(作・コレット・ニース=マズール、絵・エステル・メーンズ、訳・柳田邦男、文芸堂)。どちらも子どもに向けてやさしく死と心の再生を語りかけます。

「感性だけ」って手ごわい

「絵本ライブ」を全国で開いています。お客さんは大人の時もあるけれど、子どもの時がドキドキ。正直だから聞くふりなんてしない。感性だけの存在は手ごわいです。

子どもたちと接して思うのは、よく本に書いてある「何歳向け」というのは関係ないなあ、ということ。子どもは音や語呂が大好き。ライブをしていると、題名を言うだけでガガハ笑う絵本もあります。で、内容は頭に入っていない。それで十分。笑うことで、生きていて、生まれてきて

よかったなあ、と感じてほしい。

僕にも上は大学生までの子どもが3人います。幼稚園の送り迎えをはじめ育児にはかかわった方だけど、自分の時間がとりにくかったのは確か。「今が一番いい時ねえ」なんて言われると、ほんまかいな、と思ってた。でも、ほんまなんです。

大きくなっても、子どもは心配だし、子育ては大変。だからこそ、小学校に入る前くらいのあのかわいさは「前払い」のご褒美だったとさえ思います。子どもって、昨日できなかったことが今日できてしまう。「お父さん、あのころ忙しくて子どもと接してなかったよね」じゃもったいない。味わったかんと、二度と返ってこない時間です。



めせじ

絵本作家から

長谷川義史さん

1961年、大阪府生まれ。著作は「いいからいいから」(絵本館)、「だじゃれ日本一周」(理論社)、「ぼくがラーメンたべるとき」(教育画劇)など。

宮本さんは会社勤めに1〜2回、センター